

「ゲーテは若い頃、地質学に関する職についていた。宮沢賢治も、若い頃地質学を学んだ。中国の漢詩と地質学との関係を探り、ギリシア神話と地中海の地質を語る。文学と地質学の接点はどんなことか。岩石学を専門とする地質学者である著者は、文学作品の舞台である土地に興味を持って旅行した。本書は、著者が旅した文学作品の舞台を、著者の専門である地質学の知識と文学の教養を持って縦横にその接点を解き明かす。」本書の後ろカバーに印刷された言葉である。読み終わって本を閉じたとき、ああ、そうだったな、と思いきこされる。「文学を旅する地質学」は、地質学者による文学散歩と言って良いだろう。

こういう本を書くときは文学と地質学のどちらに軸足をおくかが難しいと思うけれど、著者の立場は地質学者で、軸足も地質学においている。そして、地質学を専門としない人に、作品に出てくる地質学的要素を解説しようとした本とも、地質学に興味がある人に文学を解説する本とも、趣が違っている。この本は、産業技術総合研究所編集の『地質ニュース』という雑誌に連載された記事が基になっているので、ある程度、地質に興味のある人が、読者となることを想定しているはずである。だから、地質に興味がある人たち（専門家に限らない）が文学を通じて別な角度から地質を楽しむ本として読んでいっていいだろう。多分これが、文芸誌に連載されたものであったら、地質の記述の仕方も、取り上げ方も、もう少し違っていたと思う。

取り上げられた作家はスタインベック、ゲーテ、宮沢賢治、ノヴァーリス、中国の漢詩人、魯迅、大岡昇平、イブセン、ラーゲルレーフ、さらにはギリシア神話、と多岐に渡り、地質もさまざまなタイプがあり、書き方もそれぞれである。どちらかというとなら著者が興味のある赴くままに旅をしたエッセイに近い感じがする。この本はなんと言っても、随所に著者が撮影した写真もあり、「自分で見てきた」迫力がある。そして読者を、実際に自分も見てみたいなあ、という気にさせる。評者なりの希望を言えば、本文の流れを邪魔しないように、囲み記事でもいいから、もう少し地学ガイド的な記事を載せていただけたらよかったかな、と思う。それは特に、第1章のスタインベックの『怒りの葡萄』を辿る部分と、第4章の中国の漢詩の世界をめぐる部分で感じた。

日本の子供にもおなじみの『ニルスの不思議な旅』は、そもそもノーベル文学賞作家であるセルマ・ラーゲルレーフが、スエーデンの子供達に自分達の国の地理や歴史を理解させようとして書いたお話である。著者はニルスの旅に沿って、昔の自分のフィールドノートを見ながら地質学的な解説をしている。写真がないのが残念だが、やはり、自分の目で見てきた臨場感は文章から十分伝わってくる。

第8章のギリシア神話をめぐる話は、再び著者の写真もあり、地質が土地を作り、土地が神々を生む、ということを楽しんでいる様子で、著者の語りも滑らかである。読んでいて気分が良い。

地質ガイド的な内容と趣が異なって、文学者の背景にある地質学に触れているのは、第2章のゲーテと第5章の魯迅、第6章の大岡昇平についてである。個人的には第2章のゲーテが地質学の専門職についていて、ゲーサイト（針鉄鉱、 $-FeO(OH)$ ）という鉱物の名

称がゲーテに因んだものであったことや、『ファウスト』が実は花崗岩の成因論として読み解けるという部分が面白かった。大学生のとき『ファウスト』を読んだけれども地質学的な発想がなかったので、よく解らない本だな、くらいにしか思っていなかった。これはぜひ、もう一度『ファウスト』を読み直さねば、という気になった。

魯迅については、緊張した時代を生きた人でもあり、中国を救うためには医学ではなく文学でなければならぬとの決意を新たにされたきっかけが東北大学に留学していたときに起きた事件であるらしい。そういう事情のせいか、著者の語り口に、ゲーテを語る時のような明るさはない。他の章とは異質な文章になっている。申し訳ないが、評者は魯迅の作品を読んでいないので、通り一遍の感想しか持てなかった。紹介されている作品と地質の両方の知識がわずかずつでもないと、著者の気持ちが汲み取りきれないもどかしさを感じた。

大岡昇平が地質学会員であったことは、この本を読むまで知らなかった。『レイテ戦記』は読んだことがあったはずだが、著者によって地質学の目で紹介されると、改めて詳細な描写に驚いた。最後に大岡昇平が著者の父親と同時代を生き、同じような経験をした、という記述は真に迫っていた。著者は大岡作品の中に父の影を見つけていたのだ。

書評と言うか、読みながら感じたことを述べてきたが、楽しい本だった。どこまでの知識を読者の前提にするのかは難しいと思うけれど、すべてをわかってもらえなくても、写真と図がふんだんにあれば、雰囲気は伝わるものだと思う。何よりも、著者の地質が好きで楽しんでいる様子は伝わってくるので、これを読んで、地質学に興味をもつひとが一人でも増えることを願っている。